

夢のある「物語」の魅力

小水力の旅 4回連続参加 マイチケット 山田和生

「小水力の旅」それは「夢のある物語」をたどって山村を訪ね歩く旅である。

「小水力」は、まずもってエネルギー自給の「物語」である。それだけではない。「小水力」の夢が実現すると、売電による財政的な恩恵が村にもたらされる。それは、荒れた森を再生する財源となり、人々が働く場をつくりだし、村の暮らしを支え続ける。森を再生し、村を再生するのは、他ならぬ森の恵そのものに由来する水資源であり、それを活かした小水力発電なのだ。これこそが、自前で金を生み出す、次の世代まで見据えた、息の長い地に足の着いた「夢のある物語」である。

御上の顔色をうかがう補助金目当ての話しではない。都市の維持のためだけに山間部の環境保護を声高に叫ぶ身勝手な都市の論理の押しつけでもない。

「限界集落」「絶滅寸前」などという無責任なレッテル貼りをやすやすと拒絶するかのような、数十年数百年という長期に渡る、世代を越えた遠大な構想がそこにはある。

しかし、ことはそれほど簡単ではない。地形的制約、年間の降水量と稼働率、水利権、人々の合意形成、必要となる大きな資金。「夢」の前には、難問の「壁」が次々と立ちはだかる。それでも成功事例は確かに存在する。過去を振り返れば、なんなく難問を解決した古くからの知恵に学ぶことができる。この同時代にも「夢」に賭け「夢」にたどり着こうとする勇気ある人々が確かに存在する。

物好きにも私が毎回小水力の旅に参加するのには、それなりの魅力があるからだ。この旅で出会う風景を直視すれば、深刻な山村の荒廃の現実がいやでも目に入る。参加者は不都合な事実に向き合うことを強いられる。そして、その山村の荒廃に「夢のある物語」を持って立ち向かう人々と出会うことができる。なによりも私を突き動かすもの、それは「世代を超えた倫理観」とでも呼べるような気概が、この旅で出会う人々の生き方には共通していることだ。それこそがこの旅の、目には見えない本当の魅力であり、私が皆勤する理由でもある。